

音楽科模擬授業における学生相互の評価活動について

— 指導法の学習の質を考える —

藤 田 光 子

Evaluation of student mutual activities in the music department simulated lesson
: Think about the quality of learning of teaching methods

Mitsuko FUJITA

【要 旨】

本研究では音楽科模擬授業を終えて、取り組みを言語化すること、また一部を口頭化することによって、学生が音楽という授業についていかに音楽的思考をもった授業展開へ向かうことができるのかという点に着目した。わかりやすい授業展開を相互に考え、学生相互に評価しあう場面を設定し、授業後の話し合いにおいて自身の授業を振り返りさらに他者の取り組みについても批判的な思考を持つレディネスを行う。これらについてはその後の自身の取り組みに有用となり、指導法の学習の質を考え、実践的経験をふまえた指導力の一助となる研究成果と考えている。

【キーワード】

小学校音楽科 指導法特論（音楽） 相互評価 模擬授業

1. はじめに

教員養成校における音楽科指導法に関する模擬授業の中で、学生たちが持つ不安要素について尋ねると、これまで音楽の科目の中で多くのことを学んできたが、実際に自分が授業を行っていく中でそれらをどう使用すればいいのかという点、音楽科では実技に関する内容も多く含まれるため、音楽技能的なことに関する点、教材研究の際に音楽的知識の欠乏から内容が深まらない点、多くの音楽授業の経験がないため具体化できない点等があげられた。これらの今学

生が持っている不安要素を払拭しつつ、技能などを最大限に生かすこと、また他者からの指摘や問題点を踏まえて、既存の学力からどのように授業展開を考えていくのか、さらには既存のものではない答えを見出していく能力が求められていると思う。

特に音楽の授業や指導に関して経験はほとんどないという学生が多く、これまで少しでも授業内で多くの学びと経験をと考え、ディスカッションやアクティブラーニングなどを踏まえた授業改善を行ってきた。

本研究では、音楽の模擬授業の中で授業者である学生と児童である学生との模擬授業終了

後の双方の評価活動に焦点を当てた。

高等教育において必要とされるリフレクティブ・ラーニングの観点から、自身の授業の振り返りをどのように行っていくかについて、本科目における学生間の相互評価によってどのような効果が考えられるかという評価活動を取り上げ、この取り組みの中から得られたその傾向と効果について明らかにしていくものとする。

高等教育においては「学生が何を学んだか」という教育の質については多く論じられている。教育の質を取らえるためには、多くの評価的観点からの自身の授業を可視化していくことが重要である。本取り組みの中でも、学生の模擬授業とディスカッション場面をビデオに収め、授業後すぐのディスカッションや学習成果の確認が、教育方法の改善にも役立っている。

また教員養成という視点から現状を見ていくと、近年大量退職や教員の多忙化により徐々に積み重ねていく教職歴を持つことが難しいと言われている。たとえば「近年の教員の大量退職、大量採用の影響により、必ずしもかつてのような先輩教員から若手教員への知識・技能の伝承がうまく図られていない状況がある」といった指摘も強い。実際、教員の経験年数の均衡が顕著に崩れ始めている。例えば、平成25年度の学校教員統計調査によると、中学校において、他の経験年数を有する教員に比べ、経験年数5年未満である教員の割合が最も高く（約20%）、経験年数が11年～15年であるいわゆるミドルリーダークラスの教員の割合（約8%）のおよそ2.5倍となっている。義務教育段階の教員に関して、このように、経験年数5年未満の教員の割合がその他の経験年数を有する教員の割合に比べて最も高い状況になったのは、少なくとも現行の初任者研修制度が導入された平成元年以降の経緯を見ても近年まで例がない。」¹⁾とある。いわば非常に速いスピードで教員としての資質を身に付けていかなければならない現状において、教員養成の段階においても「教員となる際に必要な最低限の基礎的・基盤的な学修」を行う段階²⁾といわれつつ、その「最低限」におい

ても多くを望まれているのが現状である。実践的指導力の育成が急務であることは明らかである。

2. 教育方法の改善

大学では「『何を教えるか』よりも『何ができるようにするか』に力点が置かれる。このことは、教育内容に勝るとも劣らず、教育方法の改善が重要であることを示唆する。学習意欲や目的意識の希薄な学生に対し、どのようなインパクトを与え、主体的に学ぼうとする姿勢や態度を持たせるかは、極めて重要な課題である。」³⁾とある。思考力や汎用的能力、総合的能力が求められる今、教員となる学生の実践的経験と資質能力の向上は急務であることは先に述べたとおりである。

そこで本研究では実践的経験による指導力の育成を踏まえ、教員を目指す学生の相互評価活動に視点を定め、それらが学生の授業観にどのように影響を及ぼしているか、相互評価による自身の教育方法の改善を探求するための研究である。またアクティブラーニングを取り入れ、グループ学習、ディベート形式のディスカッションを十分におこなうことが、どのように学生の学びに影響を与えているかも検証する。

小学校音楽科の授業では、表現、鑑賞の活動があるが、それぞれの活動のなかでどのように授業を進め、また他者からの評価をもらうことがどのようにその後の授業観にかかわっているかを検討するものである。これら経験のすくない学生のためにも多くの授業を体験し、またその授業をどのような視点で見、評価していくかという経験を1つでも多く持ってほしいと考えている。

この模擬授業の経験から学生が得るものは多いと考えるが、実際の事例よりから明らかになったものを以下に述べる。

3. 研究方法

- (1) 対象：平成26・27年度専攻科1年
 専攻科：小学校教諭2種免許状を取得1種免許状取得中の学生
 実施時期：平成26・27年7月実施
 内容：指導法特論（音楽）の模擬授業後学生相互の評価活動としてディスカッションを実施し自由記述の傾向分析
 検証：ルーブリック評価を実施し、各年度の評価上位と下位2名ずつを抽出し、授業の良い点・改善点について自由記述と指導案からその傾向を探る。
- (2) 対象：平成27～28年度専攻科1年
 専攻科：小学校教諭2種免許状を取得1種免許状取得中の学生
 実施時期：平成26・27・28年7月実施
 内容：指導法特論（音楽）の模擬授業終了後のアンケート調査より
 検証：模擬授業全般から指導法の学習の質について考察する。

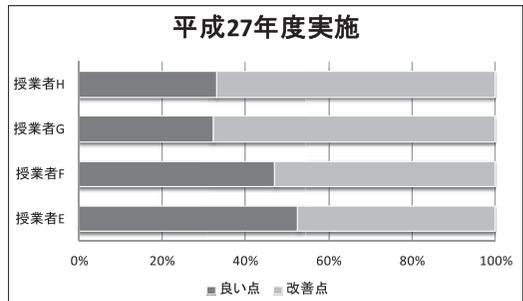
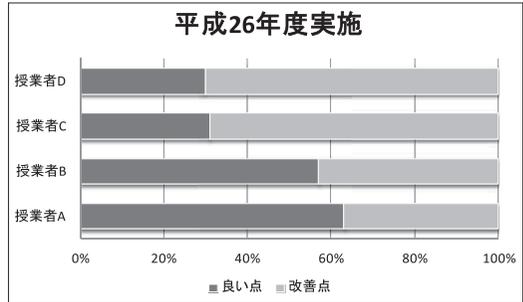
*記録・アンケート結果は、個人が特定できないよう配慮のうえ、本研究に使用する旨学生に同意を得て実施している。

4. 結果と考察

(1)では各人の模擬授業を観点から5段階のルーブリック評価し、評価の上位と下位2名を抽出、模擬授業の良い点・改善点について記された自由記述からその傾向を探る。さらに学習指導案段階での比較も行いこれら相互評価によりどのような問題点が明らかになったか検証する。

1) 自由記述の傾向から

【表2】はそれぞれ学生同士で模擬授業の観点を「授業のわかりやすさ」「内容の理解」「めあての達成」としルーブリック評価を実施し、各年度上位2名下位2名の実施者の模擬授



【グラフ1】言語化した記述件数

【表1】自由記述のカテゴリー

上位4名		
よい点	わかりやすい	見ながら
改善点	～できるか	どう～すれば
下位4名		
よい点	していた	あった
改善点	わかりにくい	不足

業後のディスカッションにおける自由記述より抽出した良い点と改善点である。

上位の学生と下位の学生に最も特徴的に見られたのが、良い点と改善点の言語化した記述件数の分量の差異である。【グラフ1】にあるように20%近く差が出ているのは、年度の異なる学生の結果であるが著しい。

【表1】のように上位4名の模擬授業に対する自由記述では、よい点として、「わかりやすい」という言葉が最も多く、また教師の態度として「児童をよく見ている」、という表記が多く見られた。また改善点では、内容について「ここまでできるか」「どう～すればよかったのか」というさらに授業内容をよくするための次のステップにつながる指摘が多い。

また下位4名の自由記述では、「～していた。」「～があった。」という事実のみの評価の内容が目立ち授業内容のわかりやすさや、授業全体のめあて目的などを見通したコメントはほとんど見られなかった。改善点としては特徴的に「わかりにくさ」が挙げられ、児童が授業や目標の理解に対するわかりにくさとともに教師側の理解についても指摘されている点が多い。また教材研究の不足や時間不足、内容不足など「足りない」と感じられる部分の指摘が特に顕著であった。教師側の理解については、音楽という授業の特性なのではないかと思われる。「音楽的技術面」「音楽的要素の理解」には現段階においても各人で差がみられることがその原因であると考えられる。

これらの特徴からから模擬授業がよいと評価された上位4名と下位4名の自由記述は、以下の3点にまとめることができる。

上位4名

①授業内容のわかりやすさ、学年に応じた児童の理解、授業全体を見据えた記述
②教師の技術や力量ともいえる授業空間づくりや雰囲気づくり、授業内での児童と教師の関係性の記述
③視覚的なものに対する準備や進め方等の手際の良さに対する記述

下位4名

①授業の全体像ではなくピンポイントでの指摘、授業全体に波及してくる部分の指摘
②教室内の空気や雰囲気づくり、教師の態度に関する指摘の記述
③教材研究や音楽的知識の欠乏による、授業者の理解に関する指摘の記述

また自由記述の中でどの表記の中にも登場する内容に、教師の態度があげられる。学生がとても気に掛けている内容であるといえる。音楽的技術や指導案と展開ではなく、教師の態度というものが授業の良し悪し、さらには授業内容にも影響を及ぼすことを懸念する記述が多い。

また批判的思考についても教師の態度や教師としての授業を行う技術面について指摘が多かった。それらの教師としての態度や授業を進める技術面への関心は学生にとって非常に高い。

2) 学習指導案事例とディスカッションから

これらの自由記述と合わせ指導案段階での差異についても検証すると非常に興味深いものが見えてきた。

最上位であった授業者Aと最下位であった授業者Hの指導案段階について特に評価規準、本時の目標、本時案について比較をおこなった。

評価規準については、双方ともに題材に即し4つの観点を踏まえた内容で作成することができている。本時の目標について授業者Aは「～を階名で歌うことができる」と結び、授業者Hは「～の拍を取れるようにする」と結んでいる。ここで授業後のディスカッションにおいても議論にのぼった内容であるが、「階名で歌うことができる」というのは明確に児童がどうなってほしいかわかりやすい。しかし「拍がとれる」というのは一体どういうことか。この目標設定自体があいまいであり、授業者が目標とするものが分かりにくいという指摘があった。これについてはさらにディスカッションのなかで、「拍を感じる」という題材と「拍が取れる」というところを無理に結びつけすぎているのではないかという指摘があった。「拍を感じながら歌う」ことといわゆる「楽典的に拍や拍子を正確にとることができる」ということはやはり無理に結びつける必要はなく、あくまでも題材の評価規準では「拍を感じ取る」「拍にあわせて体を動かしながら歌う」ことが記されているにもかかわらず、「拍を取れるように」という目標設定をしてしまうとそこにぶれが生じるのである。このように学生が双方に指摘や評価を行うことで、日常わかっているつもりで使用している音楽用語や音楽的表現についても再確認の必要性が大いにあることに気づくことができる。

さらに本時案について比較してみると、授業者Aは指導上の留意点において「4名に4小節ずつ」「黒板の階名を見ながら」「楽譜を見ながらゆっくり歌う」中心となる活動が詳しく記され、細かく児童の動きを見据えた表記となっている。その活動の深まりを段階に合わせて変化させながら指導する。この授業内の中心とな

【表3】音楽科授業を実施する際に難しいと感じる点はどんなところですか（模擬授業前）

平成28年度
児童の反応
児童への伝え方
音楽の知識が少ないため教えることが難しい
評価規準や本時案の展開、児童にどこまでできてどこまで難しいか
準備物や教材に関する理解
伝え方授業の進め方
評価
どのような力を身に付けたいか
平成27年度
音楽技術・知識
児童の反応
授業の進め方
評価活動
指導案作成
評価規準
平成26年度
音楽技術・知識
児童の反応
授業の進め方
評価活動
指導案作成
これでいいのか
児童がみにしているのか

さらに【表5】でわかるように、他の人の模擬授業を受けることに意義を感じるかとの問いにはほぼ全員が感じると答えている。

その理由のなかに、【表6】では「いつも音楽の得意な人ばかりでなく、苦手な人の授業も受ける絶好のチャンス」という回答が見られた。この内容は模擬授業後のディスカッション場面

【表4】模擬授業を終えて音楽科授業実施に難しいと感じる点に変化はありましたか

平成28年度
自分のイメージと児童の受け取り方の違い
知識だけではなくどのように支援し、授業を組み立てるといいのか
楽器使用時の児童と教師のやり取り
歌えるようにするためにはどうすればいいか具体的なこと
平成27年度
教材に関する準備の深さ
どう進めるか
児童への伝え方
平成26年度
教材研究の不十分なとき
児童をどのように評価すればよいか
伝え方
指導内容がこれでいいのか
児童との対話

でも多く論じられた部分である。音楽が苦手な教師でも音楽の授業を行うことは音楽専科を持たない小学校では十分にあり得る。ではどうすればいいのか。「教材研究・準備」が第1であり、「機器の有効利用」が第2に発言された。確かに教師が実技等に集中してしまい、児童を見ることができない場面は想定できる。実技の苦手な学生のICTの有効な使用については今後の課題となる点である。このように専門的技術力の向上はもちろんであるが、それを補う方法についてもともに議論することができる場という広がりを見せた。その他の理由として、客観的に授業を見ることができる、さらには児童目線で見ることができるという記述は多い。

【表5】にあるようにディスカッションや相互評価は100%が授業技術向上に役立つと回答

【表5】質問2・4・6

平成26年度～平成28年度回答より

n=33

質問事項	ある	なし
模擬授業を終えて音楽科授業実施に難しいと感じる点に変化はありましたか	22	11
他の人の模擬授業を受けることに意義を感じますか	32	1
ディスカッションや他者からの評価は自身の授業技術向上に役立つものと思えますか	33	0

【表6】質問2 理由

平成28年度
同じ進路で頑張っているみんなから評価してもらうことで次に生かせよい体験となる
いろいろな意見を聞いて次につなげることができる
自分では気づかない指摘ではっきりと改善すべき点がわかる。またどのようにしたら良いのかまでみんなでじっくり話して解決できる
受けた側の意見はすごく参考になる。より良い授業にするための改善策を皆で考えることができる
自分では気づかない点の指摘を受けることができる
自分では気づけない反省点よい点等に気付くことができる。アドバイスをもらうことができ改善もできる
他の人からの指摘はきついことがある。より良い授業にするためには改善点を知ることができる
改善部分よかった点を知ることができ次につながる
平成27年度
みんなの意見を聞ける
より良い授業へと考えるといろいろと発言できる
自分では気づかない点を指摘してもらえる
次への参考になる。その場で解決できるのがいい。自分で分かったつもりでもわかっていない点等
なかなか聞けないことをなにかまや先生と話し合いながら次するときはこうすればと考えられる
自分の足りない部分を指摘され、音楽ではどう説明したらいいかなど突き詰めて話し合えるところ
技術面を気にしていたが、もっと違った伝え方等で改善されることがわかった
いろいろな想いを話して解決することができた
自分の弱点を指摘されたが、こうすればいい等のアドバイスももらったので今後につなげることができそう
途中からディスカッションがとて深まるようになってきたと感じる
先につなげることができる活動になった
ひとの意見は本当にためになる
音楽技術だけがいると思っていたが、そうでないことがわかった
平成26年度
みんなから意見をもらえる
自分の弱点や強みもわかる
いろいろと意見を出し合い話し合って解決できる問題がたくさんあった
指摘が多く自分では気づかない部分が多いことがわかった
同じ学生からの指摘はとてよいくちもおもえ素直に聴くことができる
みんなで話し合うのはアドバイスをもらいやすい
改善点を見つけることができる
みんながどんな目線で授業を見ているかわかる
疑問に思っていたことも解決できる。改善策を皆で考えることができる
より良くしようと思える
授業を受けた人たちからの意見はとてためになる
すぐに先生や友達に尋ねることができ解決が早い
自分で気づかないことばかりでためになった
みんなでいいというばかりではなく指摘しあうことで変化が見られた

【表7】質問6 理由

平成28年度
自分には足りていないところに気付き他の人の良いところを吸収できる
こども目線で見ることができる
他の人のアイデアをもらうことができ学びも多い
自分では気づかないことに気付ける
よい点や改善点を見つけやすい
他の人の良いところを自分の授業に活かせる
自分では思いつかない発想などを知ることができる
自分では思いつかないことを吸収できる
平成27年度
自分の足りなさを知る
よいところを知ることができる
改善点を見つけることができる
他の人をヒントにできる
自分の進め方の改善点
気づきが多い
児童だったらと考えることができる
とにかく多くの音楽授業を体験できる
自分ではできないことを見ることができた
いつも先生等の音楽が得意な人の授業だけでなく苦手な人の授業も受けられる絶好のチャンス
平成26年度
改善点に気づきやすい
児童目線で受けることができる
第3者として見られる
他の人のいいところをたくさんもらえる
冷静に授業に向かえ気づくことができる
授業をしていると気づかないことにも気づける
自分の至らないところがわかる
たくさんの授業を経験できる
音楽の授業自体ほとんど受けたことがないので、ためになった
児童のときはこう思ったと考える余裕が持てる
音楽の授業の種類について知ることができた
自分では思いつかない種類の授業も受けられた

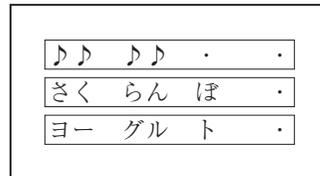
している。

このように学生が相互に評価しあい、ディスカッションすることで、実践的な指導力、科目としての専門性などを踏まえた授業展開が可能

となっている。他の人の授業を評価したり、自分の授業を可視化したり客観的に見ることは難しいが学生自身もその必要性は十分に感じていることが分かる。模擬的ではあるが、指導法のなかで相互の意見の表出が十分に行われることにより、より一層の深まりとフィードバックが生きていることが分かった。一方向からのみの授業では感じ取ることのできない、リフレクションが機能していると言える。

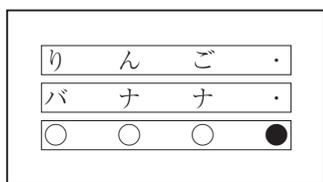
また【表7】において、「よりよくしようと考える」「解決できる問題点がたくさんあった」「話しあいながら解決できた」改善点やアドバイスの近距離化は授業を行った学生たちにとっては非常に有効である。

例えば、授業後のディスカッションの場面における学生の思考の変化として次のような事例があった。言葉を使って、「拍を感じて遊ぼう、拍を感じてリズムを取ろう」という第1学年の題材である。



【図1】拍と言葉でリズムを感じる

【図1】のように「さくらんぼ」という言葉を使用して8分音符2つずつに割り振り、4拍子をカウントしながら「さく らん ぼ ・」と展開する場面についての議論では、実際は4拍子の理解の内容ではなかったが、「4拍子の理解と思っていたのにあえて5文字を使用するのは分かりにくい」と発言。他の学生からは「ヨーゲルトなど伸ばす音を入れるのは音符と言葉が混ざり1年生には分かりにくい」「文字数を単音になるよう選択して、4分音符にあてはめたほうが分かりやすい」と徐々に次時や次段階につながる話し合いへと展開した。



【図2】単音の言葉を使用する

【図2】のように日常に即した3文字を使ったほうが導入としては分かりやすい。そこで担当者からの助言として「拍と音符、音価、リズムが教師のなかでも混在している」「リズムという言葉、拍という言葉、音という言葉の使用に統一した配慮がない」ことを付け加えた。

すると学生からは「手拍子による拍子と単音の言葉を使用することから導入するのがよい」という結論に至った。そこで、教科書と指導要領をもとに、どのような段階を経て「拍を感じて遊ぶ段階から拍の流れにのるリズムを感じ取る段階に進むのか」について学生とともに授業内で見直しを行った。第1学年では「はくをかんじてあそぼう」から「はくをかんじてリズムをうとう」、第2学年では「はくのまとまりをかんじとろう」から「ひょうしをかんじてリズムをうとう」⁴⁾と進む。学習指導要領では、第1学年・第2学年において「音色，リズム，速度，旋律，強弱，拍の流れやフレーズなどの音楽を特徴付けている要素」を「それらの動きが生み出すよさや面白さ，美しさを感じ取ること」⁵⁾について指導するとある。さらに第3学年・4学年において「拍の流れにのってリズムをかんじとろう」という段階へ進み第4学年で4文字によるさまざまな音符の種類に応じたリズムを組み合わせてアンサンブルを作成する授業へと進行している。学生は1学年だからわかりにくいと思ってしまったことや、実際に教科書において音符や休符が音価の概念として登場するのは第2学年であり、自分たちの議論が音符の種類を先に考えた順序であったことなどがこれらを確認することで理解することができた。

このように問題点や疑問を時間の経過を経ず、即解決でき、多くの意見において議論しあ

うことにより、より多様な解決策へたどり着く場面が見られた。

さらに授業後すぐのディスカッションにおいて、「他人からの指摘はきつい」「指摘が多い」などの若干ネガティブともいえる回答も見られたが、同じ志を持つ仲間の中で批判的思考ができるということ、また他人からの指摘においてのレディネスができてくるということは非常に有効な学習成果であるといえる。またその指摘に対する自分自身の考えを述べる場面を十分取り議論しあうことで、それらを超えさらなる学びへと展開していくことが分かった。

5. おわりに

指導法特論（音楽）の中で、これまでも行ってきた模擬授業後のディスカッションを改善し、のちの授業改善に役立ち、より深まるよう工夫してきた。学生には記録の重要性と可視化の重要性について学んでもらい、記録から読みとること、また実際の言葉のやり取りから発見することなどを目標に話しあいを毎回行い本研究を進めてきた。ディスカッションの後半部分では一層深まりを見せ、音楽的内容についての各人の疑問点などの解消と学生間の共有に非常に役立ったと思われ、その後行う模擬授業の内容に少なからず影響を与える形となった。さらに一部を言語化し口頭化することでより実践的経験が深まり、自身が感じる課題を近距離で解決することができ、指導法の学習の質に変化があったと言える。

【引用文献】

- 1) 平成27年12月21日 文部科学省中央審議会答申 これからの学校教育を担う教員の資質能力の向上について～学び合い，高め合う教員育成コミュニティの構築に向けて～p3
- 2) 平成27年12月21日 文部科学省中央審議会答申 これからの学校教育を担う教員の資質能力の向上について～学び合い，高め合う教員育成コミュニティの構築に向けて～p16
- 3) 学士課程教育の構築に向けて（審議のまとめ）平

成20年3月25日 p23

- 4) 平成27年2月10日発行教育芸術社 小学校のおんがく1・2 p10p16
- 5) 平成20年 学習指導要領小学校音楽編

【参考文献】

- 1) 小学校学習指導要領 平成20年
- 2) アクティブラーニングの実質化に向けて 長崎大学大学教育イノベーションセンター教授 山地弘起
- 3) 京都大学高等教育研究(2012) 松下佳代 パフォーマンス評価による学習の質の評価：学習評価の構図の分析にもとづいて
- 4) 21世紀型能力につながる汎用的な資質・能力を育成する音楽科学習～「真正パフォーマンス評価」を取り入れて～岐阜県教育委員会美濃教育事務所 薄田茂樹
- 5) 「ふりかえり」と学習・大学教育におけるふりかえり支援のために－国立教育政策研究所紀要 和栗百恵
- 6) パフォーマンス課題における音楽的思考過程の質的評価 大阪教育大学紀要 横山真理 小島律子